
天人魔

スギサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天人魔

【Nコード】

N1674I

【作者名】

スギサキ

【あらすじ】

七つの国に分かれているアースメルド大陸。そこでは人と人外が支え合い生活している。そして七つの国の一つアルセイフ王国。その国の翡翠「ゾーラノルン」が旅を始めることで物語は始まる。第一部 天人魔編

プロローグ（前書き）

初めての小説なので文章に問題があるでしょうが、精一杯頑張るの
で応援とアドバイスをしてくれると嬉しいです。

プロローグ

キーンキーンキーンー！！！！

いつもは音一つないその荒野に剣の交わる音、男達の野太い声などさまざまな声などが、あちらこちらから大量に出されている。

今アルセイフ王国とバラニアス王国は戦争中だ。

戦争の理由はバラニアスから亡命してきた者達をアルセイフが匿ったのを理由にいきなり攻め込んだ。

戦況はバラニアスが500、アルセイフが100と一方的。

そして前を見るとバラニアスの魔法師達が残りを殲滅しようと大型の火魔法を使う準備をしている。

それを見たアルセイフの指揮官が退却命令をだそうとしたがもう遅い、兵士達に向かって龍の形をした炎が近づいてきて兵士達が死を覚悟した瞬間、火の龍が消えた、いや横からやってきた水の龍に相殺された。

両軍呆気にとられて水の龍がやって来た方向を見ると、そこには大きな岩がありその上に10歳そこらで黒髪、黒目で眠たそうな表情をしているどこにでもいるような少年が立っていた、そしてその少年が腰から小刀を抜いた瞬間、バラニアス軍の方から血飛沫が舞った、さっきまで岩の上にいたはずの少年が敵陣の真ん中辺りで相手の首を切っていた、気を取り戻したバラニアスの兵士達が少年向かって剣を振り下ろしたが少年の姿はもうそこにはなく、バラニアス軍の真上に浮かび何か呟いている、そして手を下に向かって出ると少年の周りの空間から出現した幾千もの風の刃がバラニアスの兵士達を切り裂き殲滅した。そして、その少年は血の池となった地面を興味なさそうに見ながら「何で最初刀使ったんだろ」と呟いて消えていった。

その少年がアルセイフの王に仕える第十師長団、第十師団団長、翡翠「ゾーラ」ルンだったと戦場にいた指揮官や兵士達がするのは、

これを報告した後だった
・
・
・
・

プロローグ（後書き）

アルセイフ王国

<平和の国>と呼ばれ<戦の神>アルセイフを奉っている。

<平和の国>と言われているが平和なのは内側だけで国境付近ではよく他の国といざこざが起きている。

他の国と違い人種差別が少なく様々な人種が国に住んでいる。

今の王は戦争が好きではないから他の国で戦争が起きていると武力介入などで和平させている。

国は他六国に囲まれている。

バラニアス王国

<火の国>と呼ばれ<炎獄の魔神>バラニアスを奉っている。
好戦的でよくいろんな国と争っている。

人種は人と火に係る人種が火魔族が多く住んでいる。

第一話 最強の朝（前書き）

まだ慣れていないけど頑張ります!!!

第一話 最強の朝

アルセイフ王国、＜平和の国＞と周りの国の民や王都にいる民からはそう呼ばれている、だが国境付近では他国から攻められることは少なく、他国の戦を治めるために武力介入することもあり他の国より戦っている。

そしてその国の王都にある立派な屋敷で彼は目ざめた。
チュンチュンチュン。

外から聞こえる鳥の鳴き声で目が覚めた、しかし目は覚めたものも身体が重い、とりあえずボクはその重い原因を退けることにした。

「姉様、太ったんじゃないですか？」

ボクに掛かっている掛け布団がびくっ！！となり、掛け布団から顔をだした少女が顔を真っ赤にして。

「ち、違う！太ったのではなくて身長が伸びただけだ」

今、目の前、いや例えじゃなく顔を少し前に出せばキスできるくらいの距離で顔を真っ赤にしているのはボクの母が腹違いの姉、レキ・ゾーラノルン、容姿はかなりいい方で髪は赤紫で肩まで伸ばしていて16歳にしては出るとこ出て身長も165と高いそして何よりきりつとしたつり目に水魔の血を受け継いでる証の青い目周りの男達から言わせるとこう命令して欲しくなるらしい、だから今は落ちぶれているゾーラノルン家にも見合い話がかなりくるらしい。
・まあ半分以上はボクのせいだけだ。だけど普段、そのきりつとしたつり目はボクの前ではとろんとしたボクを誘ってるような目をしている。普通の男だったら興奮するんだろうなあと思いついて考えながら。

「はいはい、とり合えずボクはもう一眠りするから静かにしててね」
姉様がボクのベットに入ってくるのはもういつもの事なので気にしない。

「何、また寝るのか？」

「そのつもりだけど」

姉様は少し呆れた顔をして

「翡翠、お前昨日の事で王に呼ばれていたじゃないか」

「いいよめんどくさい、ってか昨日慣れない水魔法使ったからちよつと疲れてるし」

「ほう、何段階目を使っただ？」

「第四、無詠唱」

「もう第四を無詠唱で使えるようになったのか」

「うん、水は一番苦手だけどね」

「流石私の弟だな、かつこいいぞ」

と、言っただけで抱き着いてきた

「よく言うよ水魔法の威力だけならボクを越してるくせに」

「それとこれは別だし私が翡翠以上にかっこいい男を知らないのも事実だ」

「そんな事より今日仕事は？」

少し恥ずかしくなったので話題を変える

「今日は団長に休むと伝えているから大丈夫だ、今日は翡翠と一緒にいたかったし聞きたい事もあるからな」

「聞きたい事？」

「ここ最近増えた見合いの事だ」

「最近父上が結婚なり婚約なりしろとうるさい」

「へえ父上が」

「翡翠は何か知らないか？」

「まあ父上もまた上にいけると焦ってるんだよ。見合い話有名な家ばっかでしょ」

最近じゃ有名になったボクへのパイプを求めてくる名家が増えてしね
「そうだ、だが父上も私の気持ちも考えずにすぐ見合いの場を作るのをやめて欲しい」

うん？

「姉様」

「何だ？」

「もしかして好きな人がいるの？」

「なっ！！！！」

おっ真っ赤になったどうやら当たったみたいだな

「それならボクから父上に言っておくよ」

「や、やめろ、やめてくれ」

必死な顔で近づいてくる

「はいはい、言わないから落ち着いて、はい、深呼吸」

まだ顔は赤いけど少し落ち着いたみたいだな

「まだ13のくせにませてるぞ」

姉様が目を潤ませながら言ってくる

「まあ姉様よりは精神年齢高いと思うよ」

「ほんとうに・・・生意気だ」

なぜか姉様は複雑そうな顔をしている

「で、姉様誰が好きなの？」

「ま、まだ言うかお前は」

「だって姉様の態度見てたら好き人いるのバレバレだよ」

「も、もし好きな人がいたとして何故お前に言わないといけないんだ」

「姉様が大事だからだよ」

「なっ！！！！」

また真っ赤になった

「姉様には幸せになって欲しいからね、一応相手のことを知っておきたいんだ。できれば協力したいし」

変な虫は近づけないようにしたいし

姉様は少し黙り込むと真剣な顔になって

「私は確かに好きな人がいる」

「その人はな、私より年下で多分ちゃんとした恋もしたことないと

思う、それに、身分と言うか何と言うか周りから絶対認められないと思う」

なんか曖昧だな？

「なあ私はどうしたらいいと思う？」

「姉様その相手の人は何歳？」

「え．．．それは言わなきゃ駄目か？」

泣きそうな顔で尋ねてくる

「駄目だよ」

姉様はボソッと

「歳は13だ」

やっぱりそうか

「．．．．．」

「お、おいどうした翡翠考え込んで」

「ん、いやちよつと、ね」

「それでその人のどこが好きなの？」

「そ、それはその人の性格や在り方を間近でみると気付いたらその人のことを愛しく感じている自分に気付いてしまったんだ」

「うわ、愛しいと言ってるし」

「うるさい、本当に愛しくなったんだから仕方がないだろ！！」

「はいはい」

「むー本当にお前は」

「あのさ、姉様。姉様は本当にその人のこと愛してるんだよね？」

「ああ、愛してるこの世界で一番大切な人だ」

ボクを見る姉様の目が妙に熱い

「それならさ家や人種、その他諸々の事なんて関係ないよ、もし周りが何か言ってくるならボクが全員黙らしてやるよ」

そう言って姉様の頭を撫でてあげると。

「翡翠、私は決めたよ相手の人が大人になるまで待つことにする、見合いももうしない」

抱き着いてきた姉様を抱きしめかえして

「頑張りなよ姉様」

「そつだな……………」

ボクの胸に顔をおしつけて姉様が何か呟いた気がした

「それじゃあ行ってくるよ」

あの後結局目が覚めたから王の所に行くことにした

「ああ行つてこい」

「あ、それとボクも姉様と今日一緒にいたいから家にいてね」

ボクは返事を聞かず部屋をでた。

レキ Side

「む……………」

私は翡翠が部屋から出てすぐ枕に顔を沈めた。

枕からは翡翠の臭いがする。他の人の枕なんかにくら仲が良くてもするきが起きないし正直嫌だ。だけど、翡翠の臭いというだけで嫌じゃなくむしろ身体が求めている気がする。頭がぼーっとなり身体がむずむずする

「やっぱり、私はおかしいんだろうな」

そつ、私はおかしい彼を見ていると胸の辺りが苦しくなり、彼のことを考えるだけで頭の中が彼でいっぱいになり、彼を抱きしめると離したくなくなり、彼が抱きしめかえしてくれると何も考えれなくなり、彼に身体を触られるだけで身体中が熱くなる、軍ではいつも無表情だから氷の副団長と呼ばれている自分が自分より年齢も

身長も低い相手を考えるだけでこつも表情が変わる

そうだ私は - - - -

「好きだ、愛してるんだ翡翠．．．」
そして私は一人彼を思い続けた。

第一話 最強の朝（後書き）

簡単人物紹介

翡翠＝ゾーラノルン 13歳

アルセイフ王国の今は落ちぶれた名家、ゾーラノルン家の長男。

性格は自己中心で自由人。でも困っている人や人外を放っておけない優しい面もある

容姿は黒髪黒目、顔はそこで凄く良い訳ではないが、人や人外を惹きつける雰囲気をもっている。だからかなりモテる

王直属の部隊＜十師長団＞の第十師団、団長。

12の時、団長試験を特例で受け、刀抜き試験で＜選定の武器＞無形を抜いて受かった。その後異論を唱えた第一団、団長を一对一で圧倒的に倒したことで正式に認められた。

レキ＝ゾーラノルン 16歳翡翠の腹違いの姉。
母は水魔族の上級水魔だった。

性格は翡翠の前以外では無表情でかなりクール。
弟の翡翠を溺愛していて男として意識している。

容姿は綺麗な部類に入りかなり良い。赤紫の髪にきりつとした青色のつり目。言い寄る男達いわく命令されなくなるらしい。

翡翠の武器の先生である第二師団、団長ロビン＝サルタンの所で副

団長をしており、ほかの団員からは魔法の属性とその冷たいまでの無表情からく氷面>と呼ばれている。

第二話 最強と小刀（前書き）

書き方変えてみました。

第二話 最強と小刀

ボクは部屋から出るとすぐ転移魔法で王宮前へ転移した

転移すると王宮前にいた門兵が神でも見るような目でボクを見ていた

それもそのはず、転移魔法は<忘却された魔法>の一つで耐性のあ
る者が皆無で、耐性の無い者が使うと魔法は発動しないだけではな
く、体のどこかに過負荷がかかるか、下手すれば死ぬこともある

だからこういう魔法はほとんど使い手がなくなり、かなりの数あ
った系統が今では十系統ぐらいまで減り今では知っている者も殆ど
いない

王宮の中に入るとボクは使用人に連れられて王の部屋へと向かった。

その途中

（なあ、主）

頭の中で誰かが話しかけてきた

（何だムイ、起きていたのか）

ボクは彼女にそうかえした。これはボクの頭がおかしいとか、二重
人格でもう一人の自分と話してるのではなく

腰にかけた包丁より少し長いくらいのサイズの小刀<無形>と話し

ている

<無形>は人格をもつ小刀でボクが暇になるとよく話しかけてくる
あとムイと言うのは、彼女は元々女性らしく<無形>と呼ばれるのが嫌だと言ったからボクが付けた

(まあね、主が大好きなお姉様と話してた時ぐらいからね)

さっきの話し聞いてたってことか．．

(なあ、お前姉様のことどう思う?)

(あたしはいいと思うよ、あれは後数年でかなりいい女になるし、私が男だったら放つとかないね)

ボクはため息をついて

(そう言うことが聞きたいんじゃない、わざと言ってるだろう包丁に使うぞ)

(ご、ごめん包丁だけは勘弁して、それと主の姉様のことは主の考えてる通りだと思うよ)

ボクはさっきより深いため息をついて

(やっぱり．．姉様はボクのが好きなんだろうな)

あの事があった後ぐらいからボクをみる視線がやけに熱いし、抱き着いてきた時も気付いてるかどうかわからないけどかなり興奮している

（主はお姉様のことをどう思ってたんの）

（姉様がボクに思いを伝えてきたらその気持ちに応えるよ）

（それって、OKするってこと？）

（まあね、だってボク基本、来るもの拒まずだから）

（うわゝ最低だ、でもこの国って近親婚大丈夫だっけ）

（ダメだけど、ボクならどうとでもできるよ、それにボク的には愛人でもいいわけだし）

（はぁ．．あたし何であんたを主に選んだんだろう）

ムイがため息をこぼし、ぶつぶつ言ってる

（それはボクに惚れたからだろう）

（．．．．．）

（どうした、ムイ？）

（な、なんでもないよ、ほらもう着くよ主！！）

目の前に王の間の扉が見えた

（あ、ああ）

ボクは少しさっきの間を疑問に思いながらも会話をやめ、王の間へと向かった

第二話 最強と小刀（後書き）

<無形>（ムイ）

<選定の武器>と呼ばれ使い手を選ぶ小刀で<十師長団>の団長を選ぶ試験の一つに使われていた

つくられてから一度も抜かれたことがなかったが、たまたま<無形>のことで知って興味をもった翡翠が、抜くことに成功した

<選定の武器>と呼ばれていた理由は<無形>をつくった者がそう呼んでいたのが理由らしい

元々他の大陸でつくられていて、昔、漂流してきた他の大陸の者達を王が保護した時、礼として貰ったらしい

性格は明るく翡翠が暇になるたびに話しかけてくる

ムイに人格があり話せることを知っているのは翡翠だけで翡翠は何となく隠しているらしい

何故か翡翠としか話すことができないが、一応他の者と話せる手段はある

柄に<無形>と彫られている

第三話 最強と動機（前書き）

翡翠は自己チューです。

第三話 最強と動機

「失礼します。第十師団団長、翡翠・ゾーラノルン入ります」

ボクは扉を開けて中に入った。

中に入ると人が4人いて、ボクの正面に座っているのがアルセイフ王国15代目国王、コール・アルセイフ、歴代の王の中で最も他国に武力介入や人員援助している。だが、民に優しく彼が王に就いてから国益が上がっていることから国民からの人気はかなり高い。

その横で偉そうに立っているはげ頭の大男は去年ボクに喧嘩をうつてきて一瞬で返り討ちにあつた第一師団団長、ゲルトン・ゲラーだ。

アルセイフ王国でも1、2を争う名家の出で、実力はそこそこあるけど性格が最悪なので評価するに値しない人物だ。

部屋の隅にいる白い髪が存在が薄いおじさんは王の護衛隊長、アルフ・スレイプ。

戦っているところを誰も見たことが無く強いのか弱いのかも分からない底が見えない面白いおじさんだ。

そして、はげの横に立っている独特な魔力を身につけている女性はボクの武器・戦闘の先生で姉様の上官で第二師団団長のトルテオリノールだ。

ロングの銀髪にで黄色い瞳、容姿は良いわけでないが、会う人ほとんどの第一印象が優しそうな人と言うやんわりした顔と雰囲気をもっている。

武器を扱うに関しては多分大陸では最強クラスだと思う。

ボクの数少ない尊敬する人物の中でも一番尊敬している人物で、ボクの団長になって初の任務に同行してもらってその時、先生の武器を使つての近距離戦闘のあまりのかっこよさに気付いたら教授してくれと頼み込んでいた。

それを先生は娘に魔法を覚えてくれればと、あっさり了承してくれた心の広いお方だ。（これは翡翠の視点では）

「よく来たなゾーラノルン、今日呼んだのは昨日の礼と次の任務についての話しをするためだ」

「礼はいいですから、さっさと任務の話してください」

はつきし言ってもう帰りたいし。

「おいゾーラノルン、王に向かってその口はなんだ」

うっさいハゲだ・・・

「黙れハゲ、ボクは今、王と話ているんだ」

「ハ、ハゲだと！！お前、俺にそんな口聞いているのか」

「思ってるから、言っただよ少しは頭使えハゲ」

ハゲは顔を真っ赤にしてまだ何かを言おうとしているが。

「おいゲーラー、今ゾーラノルンに話があるのは私だ黙っている」

「も、申し訳ありません」

この王の一言でゲーラーはそれっきり話さなくなった。こんな馬鹿でも忠誠心だけはもってるんだよねあ。

「ゾーラノルン、お前をに頼みたい任務とは、そこにいるリノールの第二師団に同行してゼピロン聖国へ行って欲しい」

ゼピロン聖国が、確かあそこはトールトスに攻められていたよな。

「トールトス王国への武力介入ですか？」

ボクが先読みして言うと、王は感心しながら。

「確かに第二師団はトールトスへの武力介入だがお前は特別任務で魔獣退治だ」

「魔獣の種類は？」

ボクは少し期待を込めて聞いた。何故ならゼピロンの天使達が他国に助けを求めるほどの魔獣だとするとSクラス以上の魔獣かもしれないからだ。

「＜欲望の魔鳥＞・・・クォーカスだ」

その瞬間ボクの体に雷が走った。

「ククククク、クォーカスってあのクォーカスですか!!!!!!!!!!!!」

「そ、そうだ魔鳥類の王とも呼ばれているあのクォーカスだ」

ボクの変わりように先生以外が少し驚いている。

そう、今ボクは物凄く興奮している。〈欲望の魔鳥〉と呼ばれている鳥の王クォーカス、ボクがいつか会うと決めている生き物の第2位にこんなに早く会えるとは思ってもみなかった。

「出発は何時ですか!!!!」

「あ、明後日で出来ればお前に第二師団員30人の転移も頼みたいんだが」

「分かりました。それとボクも頼みたいことがあるんですけど」

「何だ？」

今ボクはこの機会に前から考えていたある計画を実行することにした。

「話しをする前に王、ボクはこの一年とちょっと国のために十分尽くしてきましたよね、そしてそのことに関してボクは褒美の一つも受け取らなかったですよね!!!!」

「う、うむ」

「と言う事でボクはこの任務が終わりしだいそのまま旅にでます！」

「捜さないでください!!」

「な!!そんなことが許せるか!!お前は十師団団長なんだぞ!!」

「じゃあボク団長辞めます」

「なっ!!」

これには王も何も言えなくなつて。

「だって元々無形が欲しくて試験受けただけですし。あ、言ってますけどこれは返しませんよ。それにこれ使えるのボクだけです」

無形はボクを主としているから他の者が使おうとする拒絶するようになってる。

「いや、今更返せとは言わないが」

「そうですか。それじゃあボクは旅に出るのでこれで失礼しまぶっ!!!!!!!!!!?」

いきなり後ろから衝撃が!ボクにいきなりこんなことする人は...

「何ですか先生?」

「何ですかはこつちですよ翡翠、さつきから自分勝手なことばかり話して貴方がいなくなったらミレイナは誰が教えるんですか!!」

(ここでその話をする貴女も充分自分勝手だと思う...) (

ボクは心の中で悪態をついきながら。

「ミレイナに教えられることはもう無いですよ。充分首席で学校を卒業できます」

学校とは、12〜15歳まで通える魔法を教える教育機関でミレイナが通っているアルセイフ国立学校は国で一番成績の良い学校で良い成績を残して卒業すると十師長団から団員としてのスカウトがくる。姉様はこの学校を首席で卒業してボクの団以外の十師長団全てからのスカウトがきた。

「その話しはレキちゃんには言ったのですか？」

「言ってませんけど大丈夫ですよ適当に言いくるめます」

先生は呆れながら。

「レキちゃんもうちの娘も可哀相に」

ボクはそれに苦笑し。

「まあとりあえずそう言うことで王、ボクは今回の任務が終わり次第旅にでますのでボクの代理をたてるか退団させるかそこは任せます。あと代理をたてる場合はボクの力がどうしても必要な時はこの種を割ってください何処からでも駆け付けるんで。それじゃあそう言うことでよろしく願います。」

そしてボクはそう言うと言った先生の方にお辞儀をして部屋をでて家へと帰った。

第三話 最強と動機（後書き）

この世界の設定諸々は翡翠が旅に出て少ししたら紹介します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674i/>

天人魔

2011年11月15日09時28分発行